

発音指導のカリキュラムにおける 位置づけと方法

—FD のための研究ノート—

佐々木 勝 志

I. はじめに

本学で Pronunciation I と II という科目を担当するようになって 4 年が過ぎようとしている。当初前任の先輩たちの作成したシラバスを引き継いで指導を開始したが、学生のニーズの変化などを考慮する中で徐々に変更を加えてきた。

この科目は英語音声学に基礎をおき、授業内容のかなりがこの分野の知見を学生に理解させることにおかれる傾向にあったが、元々音声学を専門としていない筆者の力量不足は却って指導の際この傾向に拍車をかけるものとなっていた。しかし、あることを知識として認識することとこの知識を実際の必要のために活用することは即イコールではない。自分自身の指導法を反省する中で、学習者が知識を活用するという視点からある種の再構成を具体的に行う必要があることに迫られ、この間いくつかの工夫や変更を行ってきた。

本稿では、この工夫や変更についてその経緯と具体的な内容を示すことで、今後の FD やカリキュラム改訂の際の準備の一助としたい。

II. より知識の活用を意識したシラバスの変更

本学学則第5条の2において「英語圏文化の学習を通して広く深い知識と教養を授けるとともに、現実社会に即した実践的な運用能力を養う。」として、英文学科の「人材養成に関する目的その他の教育研究上の目的」が示されている。また、これに基づいて「(英文) 学科の教育課程は「英語と英語圏文化の理解」と「英語コミュニケーション能力の育成」の両分野をバランスよく学び、トータルな英語力を身につける」¹⁾ことが目指されている。単純化して言えば「教養」と「実用(実践力)」の両方をバランスよく、とすることなのだが、後者については本学のホームページにおける学科紹介の中で「英語で上手に話せる」ようになるために、受験英語から実用英語への転換と「英語でスムーズに外国人とコミュニケーションしたい—それを可能にするために英語の四つの運用能力(読む、書く、話す、聴く)の基礎から応用を徹底的に学習する」ということが目指されている。そして、この内容は、それ自体で学生のニーズの分析でもあるといえるが、毎年定期的に行われている学生へのアンケートを概観する限りは、学生の要望とほぼ一致するものと思われる。

その場合「教養」と「実用(実践力)」2つのうちどちらをより重視するかということではなく、両方が具体的に展開される必要がある。また、特に後者に焦点を当てて考えた場合、自らの担当する Pronunciation I と II という科目とその指導内容は、このニーズに具体的にどんな風に応えるものとなっているのかという視点から評価し、指導法の改善に努める必要がある。

そのような視点に立って、シラバスについての変更と併せて具体的な指導法の改善を目指してきた²⁾。

II-1. 変更前のシラバスの特徴と意義

変更前のシラバスの目標設定にかかわる「ねらい」については、次の

ようになっていた。

Pronunciation I についての「ねらい」

英語の子音をより正確に発音する方法を日本語の場合と比較しながら、聞き取る力の育成と同時に学びます。パソコンの装置でまず英語の手本を聞き、それを自分で発音し、練習してから自分の声を録音して手本と聞き比べて、不十分なところを修正しながら繰り返し練習を重ねていきます。

Pronunciation II についての「ねらい」

英語の母音、強勢、抑揚をより正確に発音する方法を日本語の場合と比較しながら、聞き取る力の育成と同時に学びます。まずパソコンの装置で英語の手本を聞き、それを自分で練習してから自分の声を録音して手本と聞き比べます。そして不十分なところを修正しながら繰り返し練習を重ねていきます。

このシラバスの特徴は、Pronunciation I において「子音」の発音の仕方を学び、Pronunciation II において「母音」の発音を学ぶことを軸としていることに明らかなように、英語の音素の学習とその前提としての英語の音韻システムの学習に重点が置かれているが、他方「日本語の場合との比較」が明示されているように、日本人話者の弱点を意識して「正確な発音」を目指している。筆者としてはこの点に積極面があることを評価し、これをさらに具体化するために次節で見るように「ネイティブ・スピーカーに誤解されない発音」³⁾を目指す方向での改善を試みた。

ところで、シラバスには直接言及されていないが、ここでは、使用したテキストについても一言しておきたい。テキストは松井千枝著『英語音声学』（朝日出版）を用いているが、既に見た「日本語の場合との比較」という観点からの構成がなされているとともに、母音については「実

用的見地から記号の数を出来るだけ少なくする」という立場でその数を 11 として説明している⁴⁾。ここには、日本人学習者にとって「正確」な発音ができるためにどの程度の知識が必要かということを実用的な視点から意識していることが見てとることができる。それは学習上負担が少ない方法で効率的に学習ができることを目指したものと言うことができ、このテキストを選定した前任者の基本的な姿勢が現れているものと評価できる。

II-2. 変更後のシラバスの概要とそのねらい

これに対して変更後のシラバスは、次の通りである。

Pronunciation I についての「ねらい」

コミュニケーションのための実践的な力を育成するため、1) 英語のネイティブ・スピーカーに誤解されない発音ができるようにすること、2) 普通に話すネイティブ・スピーカーの発音を聞き取る上で特に注意すべき音声パターンを学ぶ、ということを目指します。後者については、リスニングの領域のように思われるかもしれませんが、英語のネイティブ・スピーカーが複数の単語を用いて話す時には、ある音が消えたり、変化したりします。どの音がそうなるかは、発音(正確には音声学)の知識を基礎にするため、この科目で学習します。このようなことをめざし、特にこの Pronunciation I では、英語の子音と母音について学習します。

Pronunciation II についての「ねらい」

主要なねらいは、Pronunciation I と同様 1) 英語のネイティブ・スピーカーに誤解されない発音ができるようにすること、2) 普通に話すネイティブ・スピーカーの発音を聞き取る上で特に注意すべき音声パターンを学ぶ、ということを目指します。そのため、Pronunciation II では特に、英語の母音・子音の知識を基礎に、英語音声の変化(音の連結・脱落・同化)につい

て学習し、さらに、音節の知識をもとに、より英語らしく発音することを目指して、強勢、抑揚について、時に日本語の場合と比較しながら学習します。

ここでは、英語の音声学的知識を習得するとともに、その活用によって何を指すかということについて「1) 英語のネイティブ・スピーカーに誤解されない発音ができるようにすること、2) 普通に話すネイティブ・スピーカーの発音を聞き取る上で特に注意すべき音声パターンを学ぶ」というように、より具体的に示すことに努めた。前者は「英語を話すための能力」にかかわり、後者は「英語を聞き取るための能力」に関わるのであるが、変更前のシラバスでは後者については、必ずしも明示的に示されていないように思われた。そのため、次節で述べるように、この科目の他の科目との関連について学生に誤解が生ずることにもなっていたことから、その点も意識して具体化に努めた。

ところで、より知識の活用を目指す方向での具体化に努めたとは言え、この変更において「英語と英語圏文化の理解」という大きな意味での「教養」として英語の音声学的知識を学習するという視点を切り捨ててコミュニケーション上の「実用性」のみを強調するものに変更しようとしたわけではない。そういった「実用性」のみを強調するなら、例えば母音や子音の知識については、日本語にはない音や特に紛らわしい音の調音法のみを学べばよいことになりかねない。しかし、英語にも日本語にも同じように存在する音の調音上の特徴を知ること、言語音についてのより深い知識が身につくだけでなく、そのような知識を基礎にしないと「音の連結・脱落・同化」といわれるような、英語のネイティブ・スピーカーの自然の発話を聞き取るための知識も得ることが出来ず、それは、結果として「実用」面でのマイナスにもなる。

他方、英語音声学の知識一般を自立的に学習することがこの科目の目的ではない。「教養」としての目的だけならそれでよいわけだが、これと

バランスをとって「実用」を目指しており、それは英語によるコミュニケーション能力育成の一貫として位置づけられていた。そして、そのことにとっては、英語音声学の分野で学問的に見いだされた知見を可能な限り深く広く教授するというような極端な「教養」重視の姿勢を避けて、学習者の負担をも考慮した学習事項の組み替えや精選が目指されなくてはならない⁵⁾。

この点を意識して大きな組み替えを行ったのは Pronunciation I（前期学習分）における学習内容を英語の子音と母音としたことである。変更前、英語の母音は、Pronunciation II（後期学習分）で学習するように配分されていた。しかし、英語の音素についての基本的な知識をなるべく早めに全体として学習することは次の点で有効である。すなわち、一方では「1）英語のネイティブ・スピーカーに誤解されない発音ができる」ためには、日本語にない子音を意識するというようなことだけではなく、母音においても日本語との違いを意識して発音できることが求められる、という意味で。また他方では、後述するように Pronunciation II の内容は、子音や母音についての知識を前提にするものであるため、II において子音や母音について復習を兼ねて行うことで、その定着をはかることもできるわけである。

ところで、このことは Pronunciation I の学習量の増大＝学習者の負担増を意味するわけで、対応した学習内容の削減を検討した。具体的には、英語の子音・母音についての学習で用いられるテクニカル・ターム (bilabial stop や front vowel など) の習得を変更前は義務づけていたが、これをより簡略化して、子音や母音についての音声学的な調音法の認識と併せて発音記号として習得することにとどめた。ただし、英語の音韻体系それ自体をおおよそ理解することが必要なことから、子音表や母音表の意味を理解し、それらの表に音素記号（発音記号）を書き入れることが出来るようになることは求めた⁶⁾⁷⁾。

こういった点はシラバスに明示してはいないのであるが、今回の変更によって「精選」したもので、そういったことは具体的な指導場面ではこれまでそれぞれの担当者が行ってきたものと思われるが、今後シラバスに明示する工夫も必要であると考えている。

なお、Pronunciation I では、「連結・脱落・同化」などの例の聞き取りを Pronunciation II の一部先取りとして、センテンスのレベルで取り入れている。総じて、子音や母音についての知識に基づく調音法について学ぶ場合には、単語のレベルでの学習が多い。しかし、実際のコミュニケーションは節や文のレベルで積み重ねられ discourse (談話) として展開されるため単語より上のレベルでの練習が必要である。ところでそういったレベルでの発話では、通常のネイティブ・スピーカーの場合の自然の発話において、例えば閉鎖音の語末が脱落して聞こえにくくなるといった例は、学習した音素の現実的な現れであるため学習者にとっては「実用的な情報」として伝わるものと思われる。

なお、音声学のテキストにおいて提示される例は、最小対立 (minimal contrast) を意識したもので、必ずしも使用頻度が高く学習者に馴染みの語彙とは限らないため、よりコンテキストを意識した例に学習者が触れる工夫が必要であると思われる。

以上のように Pronunciation I での学習内容を増やしたことは、結果として Pronunciation II の学習内容を減らし、そのことでこの科目の授業展開に時間的な余裕ができたが、それだけではない。

変更後のシラバスによる Pronunciation II では使用テキストの順番に従って「音の連結・脱落・同化」から学習することになっているが、その内容が明確に理解できるためには、子音・母音の基本的な知識を基礎としてこれを活用することが求められる。既に述べたように、それは Pronunciation I で学習したことから復習と定着としても意義をもつが、同時に「普通に話すネイティブ・スピーカーの発音」を聞き取る能

力の育成でもある。それ故 Pronunciation I においてもその「ねらい」の実現のために具体的な表現を通して「音の連結・脱落・同化」を先取的に学習してもらった。

Pronunciation II ではこれに続いて取り上げる「音節」についても、単語を音節に切り分ける際に、子音・母音の知識を活用することになるが、この「音節」についての知識は、続く「強勢・抑揚」といったことがらを学習する上での理論的な前提になる。

この場合、音節に強勢 stress が置かれることは受験英語におけるアクセントの位置を問う問題などによって多くの学生が知っていることではある。しかし、上述の音節の区切りに切り分けることは、子音・母音の知識を活用すると言ってもそう単純でも容易でもない。具体的には使用テキストの説明の範囲での知識の活用を求めることにとどめるべきであるが、併せて、強勢・抑揚についての実践的な練習と結びつける必要がある。そしてこの点では、次節でもふれるが、Listening や Speaking の指導と連携し、その教材の一部を活用することも考慮すべきと思う。

III. カリキュラムにおける発音指導の位置づけ

毎学期行う学生諸君へのアンケートに対する回答の自由記述の中に必ずと言ってよいほど「この科目はリスニングとどう違うのか」というのがある。既に見たように、変更前のシラバスの内容が「正確に発音する」ということに重点が置かれていたこともその理由の一つと思われるが、科目名である Pronunciation の和訳としての「発音」に学習内容についての理解が引き寄せられて誤解されていることにも原因があるように思われる⁸⁾。

既に前節 II-2 で述べたように、変更後の Pronunciation I と II の「ねらい」の具体化に際して、「2) 普通に話すネイティブ・スピーカーの発音を聞き取る上で特に注意すべき音声パターンを学ぶ」ということを加

えることで、このような誤解に対する基本的な回答を与えたことになると思う。しかし、それにも関わらず、1、2名程度と極めて数は少なくなつたとは言え、まだそのような誤解が生じる背景として、この科目とカリキュラム上の関連する他の科目との関係が必ずしも明示されていないことがあるように思われる。

そこでこの点を考えた場合、科目名に「英語音声学」という堅苦しい印象の表現を避けたとは言え、音声学的な内容をコミュニケーション能力の育成に生かすことを目指したのがこの Pronunciation I と II であるとするなら、この場合の Pronunciation は Listening のみに対応するものではなく、Listening と Speaking の両方に対応するものであるというように位置づけられるべきものであり、本学のカリキュラムにおいても実際にはそのように機能してきたのだらうと思われる⁹⁾。それは、文法が「話す」「聞く」「読む」「書く」という4技能のどの分野にも不可欠であると同様の関係にあるものである。ただし、Pronunciation においてはその性質上文法より範囲が狭く「話す」「聞く」技能に対応する。

このように考えた場合、Listening や Speaking といった科目の指導において具体的に Pronunciation (英語音声学) の知識がどのように関わるかということが問題となるが、この点で特徴的なリスニングの教材の一つを見てみる。

JACET 関西支部リスニングテスト研究会著『英語のリスニングのストラテジー』の構成は次のようになっている。

- Chapter I 英語の音声聞き取りのストラテジー
- Section 1 英語の音を聞き取る
- Section 2 単語・句の強勢に慣れる
- Section 3 文の強勢とリズムに慣れる
- Section 4 音声変化——消える音になれる
- Section 5 音声変化——つながる音になれる

Section 6 音声変化——変化する音に慣れる

Section 7 外来語と固有名詞を聞き取る

Section 8 数字を聞き取る

Section 9 意味グループ単位で理解する

Section 10 イントネーションの意味を理解する

Chapter II 内容理解のストラテジー

(以下略)

一見して明らかなことは、Listening 用にしても Speaking 用にしても最近のテキストの多くは機能的な項目のシラバスを軸としたものが多い中で、このテキストの特徴は、その前半部分 (Chapter I) では「英語の音声聞き取りのストラテジー」として、Section 7 と 8 を除いて事実上音声学の知見を体系的に活用する内容となっていることである。「音声学シラバス」と言ってしまうと明らかに言いすぎであろうが、いわば、文法シラバスにも匹敵する構成になっていると言える。

これに対して、英語のネイティブ・スピーカーの教員の担当することの多い Speaking 用のテキストの場合は、機能的なシラバスに基づくコミュニケーション活動としての activities が中心であって、文法であれ発音であれ、そのような activities との関係で部分的に取り上げられるもので、体系的に指導されるわけではない。もちろん、この科目の目的からするならそれは当然のことと言える。

既に見たように、音声学の知見を体系的に組み込むか、機能的なシラバスが展開するトピックの内容に出てくる範囲で部分的に取り扱うかの違いがあるにしても、Listening、Speaking 両方の分野で、音声学の知見の活用が文法や語彙の知識に加えて必要であり、本学英文学科の必修科目としての Pronunciation I、II も「教養」としての意義を超えて「実用」という意味でそのような役割を期待されるものと言える。

ところで、それでは Pronunciation I、II は「実用」の観点からは Listening や Speaking に活用してもらうことを期待することに留まってよいのだろうか。この間のシラバスの変更はそのような活用を期待する方向に少しでも近づくことを目指したと言えるが、この点をより稔りあるものにするためには更に工夫が必要である。

その点で、Aoki, M. & Edwards, C. (2009) は示唆的である。そこでは Listening と Speaking 担当の教師が、共通に指導するクラスの学習者に与える言語材料を同一にしこのグループと、クラス編成の関係で共通に指導しないクラスの学習者と比較して次のように報告している。

In this study, students in speaking and listening classes taught by the authors received instructions using the same lessons on numerical expressions over a period of one school year. They were evaluated to determine whether by studying limited language content over two segregated skills classes they would have better results than a control group on a posttest designed by the authors. Data was analyzed for significant differences and correlation by SPSS. Results were inconclusive, however, survey results showed positive student perceptions of the instruction.

統計学的な計測結果では、必ずしも有意差は出なかったとはいうものの学習者の反応には積極的なものがあつたようで、一定の成果があつたものと言えるが、ここでの方法は更に Krashen (1994) を援用して次のように言うように、Pronunciation I と II の指導においても考慮すべきものと思われる。

Teacher collaboration and content integration would benefit anxious first-year students by lessening the amount of language study and by increasing chances for repetition and engagement with the same lan-

guage to deepen understanding and improve proficiency.(p.29)

特に、上に示されているように繰り返しによる学習事項の定着の効率化の威力を考えた場合、それぞれで位置づけが異なる科目が言語材料として共通部分を設けることでそれが可能になるとともに学生の負担も軽減されると言える。Pronunciation I と II で言えば、当面は Listening や Speaking のテキストの中から、子音・母音について日本人学習者にとって困難である日本語にない音を含む単語をセンテンスレベルで抽出・教材化して指導するとか、「連結・脱落・同化」の例を同様に取っだして指導するということが考えられる。そしてこれを踏まえ、更に、音の強勢、抑揚に関わる活用にも広げていく必要がある。

ところである同僚の担当する科目で学生にテキストの音読をさせた際に「発音がよくなっている」ことに気づいたとのことである。たまたま筆者が担当しているクラスの学生たちだったのであるが、Pronunciation の学習が本当に貢献しているのだとすると、これは心理学で言う「転移」であり、この科目の本来の目的が果たされていることを意味する。しかし、そう判断するためには実証的な検証が必要であり、ここでは、今後そういった視点からの検証もこの科目に必要なことを確認しておきたい。

IV. 英語教育の中での発音指導の位置にかかわって

田中克彦(2008)は音声学と音韻論の関係について興味深いことを語っている。

…言語学を外から見ている人が「言語学って、何やってんだ、つまらない」っていうときは技術としての言語を指しているね。例えば音声学。だけどそれが音韻論のレベルになると一変する。しかしそれへの驚嘆は、音声学という技術面を理解してはじめて得られるものだ。問題は、そのイ

デオロギー的部分が社会に結びつくその仕方にある。自然的な基礎をもちながら、自然をこえる。」(p.97)

はじめて外国語を学習する場合、いわば母語という節穴からしかその音声的特質を認識できない。例えば、①我々日本人は日本語にはない英語の/θ/の音素は/s/で代用して発音してしまうというようなことがそれである。しかし、②両者の違いを言語音の発声についてのいわば物理的相違として分析し、その知見を活用した場合には、混乱なく区別して発音できるようになる、とすることが出来る。その場合、敢えて単純に言えば①が音韻論的レベルであり、②が音声学的レベルであると言えるだろう。田中氏は②については「つまらない」と評価する人の存在を示しているが、英語でコミュニケーションしようとするればこの種の「技術」としての知識の活用が有効であり、本稿でのこれまでの議論は全てそのような発想によるものである。

しかし、一つの言語についての音韻論レベルのある程度体系的な認識は自分の母語の音韻体系についても意識させるものであり、田中氏も述べるように、それは音声学による言語音についての物理的な認識を媒介としながらこれを超えるものと言える。そしてこのことは、英語が国際語として用いられる地域が拡大すればするほど、その地域の元々の言語と部分的には同化するなどの影響を受け独自の「英語」となりいわば World Englishes を形成しつつある中では、元々の英語の音韻体系自体が危機に晒される可能性のあることを示している。

数年前のことだが、シンガポールで学会があったため Singlish にふれる機会があった。学会の会場への道をショッピング・モールの案内の女性に尋ねたのだが、中国語と思われるアクセントのせいでよく聞き取れず、何度か聞き返さざるを得なかった。案内にはインド系・マレー系・中国系の3名の女性が常時いることから共通に話される英語の役割が

大きいことは言うまでもなかったが、当然のことながらそれぞれの民族語の背景が話す英語に反映していたと思われる。そこで筆者としては自分の知っている英語の音韻の知識だけでは直ぐに理解できない経験をすることになった。

2008年9月15日のアメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻を直接のきっかけとした世界的な景気後退は「100年に1度の危機的事態」とも「2008年恐慌」¹⁰⁾とも言われているが、今のところ、その打開のために中国を中心とするアジア経済と市場の発展に大きな期待が寄せられそこにビジネス・チャンスを求める動きが活発化している。そしてそれは、世界語としての英語がよりアジア諸国へ浸透することを意味する。しかもその場合、それらの地域で話される英語の音韻体系はそれを話すその地域の人々の母語の影響を受け元の英語の音韻体系から離れ、そのような地域がますます拡大するかもしれない。

このようなことは、当面する英語教育の課題からは緊急性が遙かに低いとは言え、バランスのとれた英語教育という視点に立つなら社会言語学的視点にたつ上述のようなことがらも「教養」という視点から話題とすべきものと思う。実際、短期留学を経験する諸君は留学先で様々なナショナルリティを背景とした英語にふれるのであるから、それは「実用」でもあると言える。

V. まとめ

教師としての自分の個人的な経験では、とりわけそれが学問的に体系的で完成度の高い理論であればあるほど自分の知っている知識を出来るだけ多く学習者に伝授したい誘惑に駆られる。しかし、言語の運用能力の向上を目指している学習者にとってはいい迷惑である。言語運用にとって言語知識は不可欠なのだが、学習者の最終的目的地は言語知識の獲得そのものではなくそれはいわば手段なのである。Pronunciation I と

IIのシラバスの変更を軸に指導法の改善を模索してきたがその際に念頭に置いたのはこのようなことだった。

その意味で、シラバスのレベルでは一定の整理が出来たと言えるが、個々の内容の面で言うと、学習者である学生の傾向の変化も含めて具体的にどこまでの知識が必要かについてもまだまだ吟味される必要がある。ただしその際、「教養」としてのバランスも無視されるべきではない。

本稿では、Pronunciation IとIIをListeningとSpeakingとの関係で位置づけ、指導教材の一部に共通のものを想定した今後の改善を考えたが、この点は、ListeningとSpeaking以外の科目との連携としても模索されるべきものと思う。

英語教授法という理論領域を考えたとき、それが具体的な実践とその結果に対する評価を含むものだけに、体系的で完成度の高い理論を期待するよりも、「折衷教授法」とも言われるように効果のある方法の組み合わせを想定することが、結果として学習者の期待に応えるものと思われる。その意味で、折衷的ではあってもそれぞれの科目の間を結ぶ具体的な指導法を模索したい。

注

1) 『2007年度自己点検・評価報告書（第三者評価）』 p.13

なお、本学英文学科の教育目的それ自体のより立ち入った検討が必要な面もあるが、本稿の目的からはおおよそ以上のようなことを確認しておけばよいと思われる。このような教育目的自体は「より時代に調和した形で具体化する努力」（『2007年度自己点検・評価報告書（第三者評価）』 p.14）がなされるべきもので、学校組織としてそのための点検が定期的に行われることになっておりそれはそれとして深化されるべきであるが、本稿の課題は、あくまで現行の目的体系においてその具体的教育場面での実現をどうするかということである。

- 2) 本稿の視点は、これまでのシラバスをネガティブな観点から評価するというものではない。むしろその意義を確認し、その点を肯定的に評価しつつその現状の改善を目指したものである。特に、音声学の基礎知識を念頭にこの科目の指導法を評価し直し発展させるということからは、先輩である前任者達が築き上げてきた基本的な部分を継承すべきものと考えている。
- 3) Roach (1983 : p.6) では、次のように述べている (ただし、下線は筆者による)。

No pronunciation course that I know has ever said that learners must try to speak with a perfect RP accent. To claim this mixes up models with goals: the model chose is BBC (RP), but the goal is normally to develop the learner's pronunciation sufficiently to permit effective communication with native speakers.

- 4) 子音や母音をどのように認識するかは、大枠では一致しているとは言え、細部については論者によって異なりそれによって用いられる記号 symbol にも多少の違いが生ずる。Roach, P. (1983 : pp.43-44) も次のように述べている。

There can be disagreement about the most important characteristics of a sound that a symbol should indicate; one example is the vowels of the words 'bit' and 'beat'. Some writers have claimed the most important difference between them is the former is short and the latter long, and transcribed the former with **i** and the latter with **i:** (the difference being entirely in the length mark); other writers have said that the length (or quantity) difference is less important than the quality difference, and transcribe the vowel of 'bit' with the symbol **I** and that of 'beat' with **i**. Yet another point of view is that quality and quantity are both important and should both be indicated; this point of view results in a transcription using **I** for 'bit' and **i:**, a symbol different from **I** both in shape of symbol (suggesting quality difference) and

length mark (indicating quantity difference) for 'beat'.

学習者の負担を軽減するために覚えるべき記号の数を少なくすることは重要であるが、論理的にわかりやすさが記号に現れていることは、学習者にとっても利点であろう。現在使用している松井千枝著『英語音声学』は上で示された最後の視点である「質も量も」重視するものとなっている。ただし、日本の辞書の中には、上の分類でにおける「量」に基づく視点のものも多く、直接には発音記号に現れるため、この異動の説明が不可欠となっている。

- 5) Gimson (1989) では、最終章に付録として英語の発音指導について説明されている。それに対して、本稿でも参考として引用している Knowles (1987) や Roach (1983) はスペシャリストではない読者を対象に、音声学をその知識の活用の観点から書かれている。

本学 Pronunciation I、II を指導するためのテキストとしては、明らかに後者の構成のものがふさわしく、学習者のレベルを勘案した上で選択されるべきものと思う。

- 6) なおここでの、「子音表や母音表の意味を理解」というのは、例えば子音表の bilabial stop (両唇閉鎖音) の位置に無声音の音素記号 (発音記号) としては /p/ が、有声音としては /b/ が割り当てられるのであるが、その場合、bilabial については「両方の唇のところ」、stop については「閉じて一度空気の流れを止めて吐き出す」というように、調音点と調音法の意味が分かることを指す。bilabial stop (両唇閉鎖音) というテクニカル・タームを覚える必要はないが、調音のための基本的な考え方が理解されていることを求める。
- 7) Knowles, G. (1987 : p.13) では、次のような指摘がある。

Phonemes are conventionally referred to in phonetic terminology, e.g. /b/ is a 'voiced bilabial stop', which is very difficult to follow until you have learnt enough phonetics to understand the individual terms. It may be helpful in the early stage to refer to phonemes by name. If there is a good correspondence between

the phoneme and a particular written letter, no harm is done in using the conventional letter name, e.g. the phoneme /b/ can be called 'bee'.

しかし、既存の文字に対応しない場合に困難がある。そこで、すぐ続けてその方法を示して、例えば二重音字 digraph を用いることなどが示されているが、具体的場面ではそれらも参考に対応するとともに、常に子音表全体とのかかわりで個々の音素を指導することが有効ではないかと思われる。

- 8) さらに、当初は、『英語音声学』のテキストの他に、音声学で学んだ知識をリスニングでも用いることを期待して、リスニング用のテキストを自習書として学生に指定して、そこから定期試験の際に出題もしていたが、このテキストと音声学で示したことがらの直接的な関連について指導する時間的な余裕がなかったこともこのような誤解につながったものと思われる。その後、このリスニングに関わる部分は本文で示したように「連結・脱落・同化」との関連で指導する方向に転換したため、自習用のリスニング・テキストは廃止した。

- 9) Hewing, M. (2004) は、

Pronunciation is an important aspect of both speaking and listening. (p.16)

としたあとで、さらに次のように述べている。

...it is a useful assumption to make that for most learners for most of the time an ability to hear features of pronunciation will be at least a useful starting point for developing their ability to produce them in their own speech.(p.17)

英語の特定の音素を発する能力と聞き取る能力との間に一定の相関があることについて述べているわけであるが、上の引用の前の部分では、常に関連性があるとは限らないという事実についても認めており、必ずしも内在的なものとは言えないと思われる。例えば、よく言われるように日本人話者にとって区別が困難だと言われる / l / と / r / の区別は、音

声学的な知識を適用して正しく発話することは比較的容易であってもこれを識別して聞き取ることは容易ではない。聞き取る場合には文脈の助けを借りる場合が相当多いのではないかと思う。むしろ指導においてはこのような違いを意識することが重要だと思われる。

- 10) 前者は前米国連邦準備制度理事会議長グリーン・スパンの発言として有名だが、ちなみに後者に関わっては、2009年度の経済理論学会の大会の共通論題が「2008年世界恐慌と資本主義のゆくえ」となっている。

参考文献

- Aoki, M. & Edwards, C.(2009). “Effect of Integrated Vocabulary Instruction”, *Hokkaido Musashi Junior College Memoirs*, No.41, 25-51
- Gimson, A.C. (1962) 1989. *An Introduction to the Pronunciation of English*, 4th ed. London: Edward Arnold.
- 田中克彦. (2008) 『言語学の戦後』(三元社)
- 北海道武蔵女子短期大学. (2008) 『2007年度自己点検・評価報告書(第三者評価)』
- Hewing, M. (2004) *Pronunciation Practice Activities*, 5th ed. Cambridge University
- JACET 関西支部リスニングテスト研究会. (2006) 『英語のリスニングのストラテジー』(金星堂)
- Knowles, G.(1987). *Patters of Spoken English*, A Pearson Education Print on Demand Edition
- 松井千枝. (1995) 『英語音声学』(朝日出版)
- Roach, P.(1983). *English Phonetics and Phonology*, Cambridge University Press. 10th printing 2006